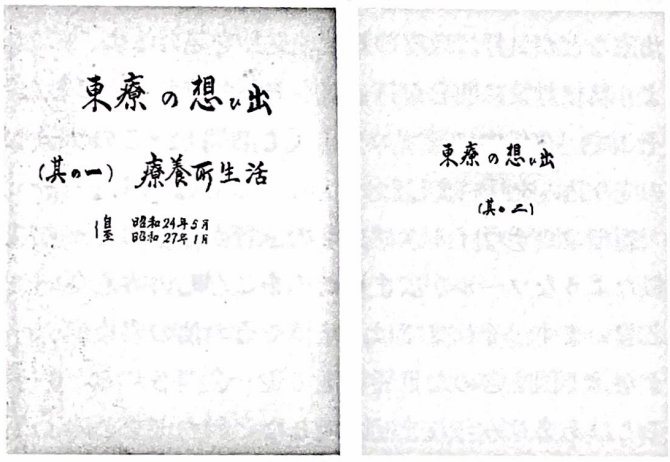
昭和20年代の療養生活―中村勝治氏のアルバム

結核予防会
代表理事　工藤 翔二

表紙に「東療の想ひ出」（其の一），（其の二）と記された2冊のアルバムは，70年余にわたって国立病院機構東京病院の名誉院長室に保管されていたものである。

撮影者は，昭和24年5月から昭和27年1月まで，東京療養所（東京病院の前身）で療養されていた中村勝治氏である。100枚を超える写真には，共に過ごした療友やそれを支えた医師・看護師など，当時の療養所生活の姿が生き生きと記録されており，生に向かう人々の絆と歓びさえ伝わってくる。



アルバム「東療の想ひ出」

撮影者特定の契機となった写真

当時の入院台帳が残されていない中で，アルバムに記された氏名だけから撮影者中村勝治氏（以下，氏）の来歴に辿りついた経過も一編のドラマではあるが，本稿の趣旨から外れるので割愛する。

氏は，東京帝国大学工学部で航空工学を学び，昭和9年卒業後に中島飛行機に入社し，真珠湾攻撃の主力であった九七式艦上攻撃機の設計主務を務められた。中島飛行機在職中に結核を発病し，戦後になって東京療養所に入所して，このアルバムを自身の記録として残された。

写真集にみる当時の療養生活

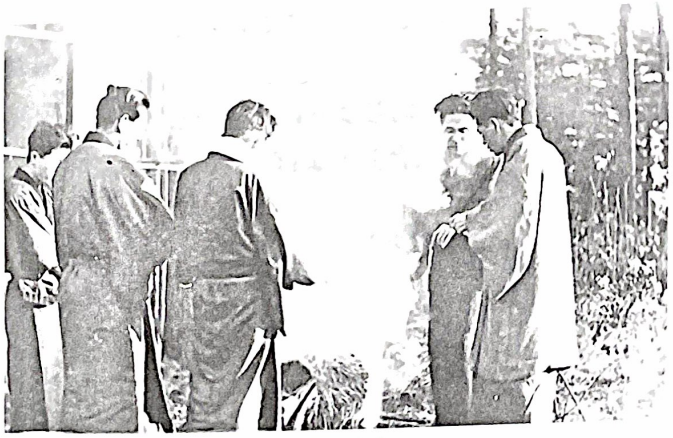
氏の療養所入所後最初の写真（昭和24年5月）には，「中村（38歳）」とある。南3寮6番室という大部屋が氏の病室であった。間もなく胸郭成形術を受けた。手術直前の写真には，同室の療友や看護師，付添婦らに囲まれる氏の笑顔がある。

手術を控えた療友の励ましだけでなく，回復して外気舎に移るときや，退院の時など，頻回に記念の集合写真が残されている。

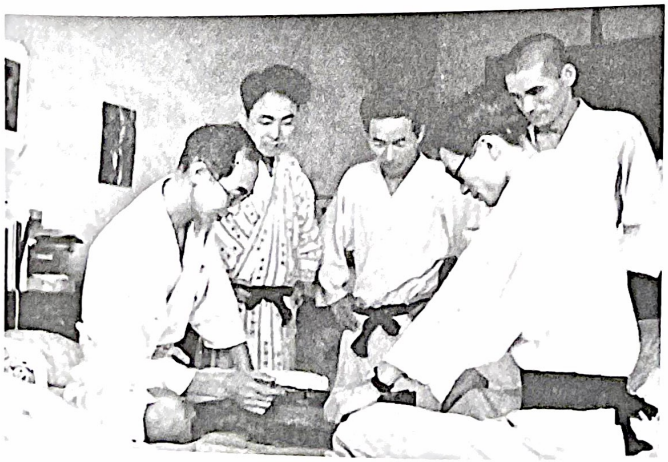
胸郭成形手術の前に記念写真

大気・安静・栄養を柱とする療養所の窓は大きく開け放たれ，冬は寒い。コスモスの残る晩秋から早朝の焚火は日課であった。

療養所にはたくさんのクラブや同好会があった。「一高会」，「五中会」などの同門会はもとより，俳句班（機関紙『松濤』），短歌会（『古今』），成人文化講座，ロシア語講習会，碁・将棋，写真班（『光陽クラブ』），ピアノ班，園芸班など枚挙にいとまがない。そこには，素人の同好の士だけでなく，その道のプロもまた患者であった。写真集には，私も知る俳人石田波郷の姿も“先生”敬称をつけて写されている。



早朝の焚火



ベッドの上で『へぼ将棋』（ママ）

たくさんの写真には，療友一人ひとりの姿がその名前だけでなくコメントを付けて残されている。意外に思うのは，女性患者も“ガールフレンド”と称して同じように登場することである。女性患者にはしばしば，（後の○○氏夫人）というコメントが添えられている。多くは療養中に若い療友同士のロマンスが生まれたのだろう。右上の写真は，お向かいの病室の女性患者さ

５寮２番室○さんの退所のお祝い

石田波郷さんも療友であった

んの退所祝いの光景である。

まるで，映画『青い山脈』の一コマを見るような左上の写真には，「きんらん，ぎんらんの花を摘みに野火止川をこえて，黒目川の丘をハイキングした折」とコメントが添えてある。

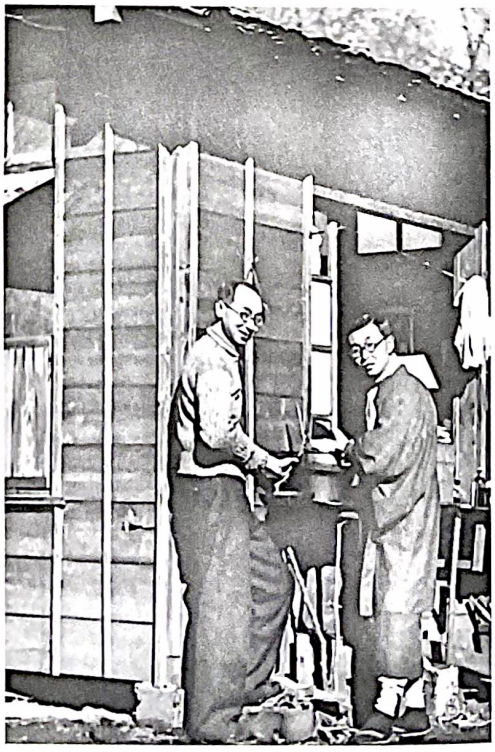
この写真集でなにより癒されるのは，2年半にわたる療養生活のスナップ一枚一枚に，闘病の辛さを感じさせる暗さがみられないことである。闘病仲間はもちろん，看護師や付添婦との交流と笑顔，柳瀬川や野火止用水など近隣散歩の写真からは，結核療養の楽しささえ感じられる。戦争をくぐり抜け，新しい世の中を手にした希望が投影しているのかもしれない。軽快して退院する患者を見送る喜びの人々にも，亡くなった療友を裏門から見送る悲しみの人々にも，療養生活を共にした同志のような感情がうかがわれる。これは，藤沢周平の『半生の記』（文春文庫）に書かれた彼の闘病生活（昭和26年に発病，保生園（現在の新山手病院）で手術）でも感じたことである。

黒目川の丘にて

亡くなった療友を裏門から見送る

氏は，アルバムの添え書きの中で，このように書いている。「結核の療養所生活は期間が長い。2年，3年，長い人になると5年，10年を超す人もいる。そこでは，あらゆる階層の人が，一般社会から離れて，寝食を共に暮らしている。そこで，思想・修養・趣味・娯楽・其他いろいろのグループが数多く結成され，映画，講演会等の催し物も多く，患者は患者なりに心の慰めを満たし合っている。まさに，ここはひとつの社会である。」

氏も多くの患者と同じように，回復して広大な敷地内に点在する「外気舎」とよばれる患者2人で居住す



外気舎の前で自炊

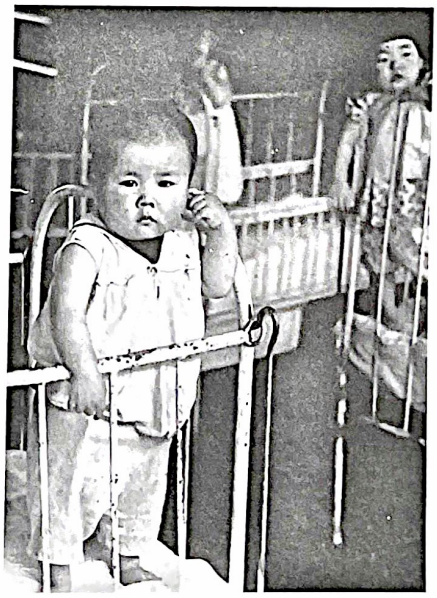
る小屋に移った。外気舎に移ることは，退院間近を意味しており，患者にとって喜びであった。前頁右下の写真は，外気舎の前で，同室の療友と一緒に自炊する姿である。多くの療養所にあった外気舎は，ほとんど現存せず，唯一，国立病院機構東京病院に一棟が保存されている。こうして氏は昭和27年1月，めでたく退院された。

退所の前に狭い外気舎で“ガールフレンド”たちと

氏は，退院後，中島飛行機を前身とする富士重工業株式会社（現在の株式会社SUBARU（スバル））に身を置かれ，スバル自動車顧問，神奈川スバル自動車（株）監査役等を務められた。

本アルバムは，氏の著作の印税振込先を辿ってアルバムにも写る御長女（当時小学5年生）に返却された。その折に，本アルバムの結核史における重要性に鑑みて，資料としての複製と公開の了承を得た。複製版は，結核予防会結核研究所，国立病院機構東京病院，清瀬市立郷土博物館に保管されている。

最後にアルバムにある当時（昭和26年頃）の『結核研究所』，『小児結核療養所』の写真を添える。



昭和26年頃の結核研究所と東京都立小児結核保養所の子どもたち（撮影者：中村勝治氏）

註：東京都立清瀬小児結核保養所（昭和23年11月設立、昭和28年11月に東京都立清瀬小児結核療養所に改称、後の東京都立清瀬小児病院。中村氏のキャプションでは療養所とされているが、撮影年から保養所とした。